

〈解答〉

- ① 1 (最初) それがし (最後) て来たれ (完答)
- 2 そのおりふし
- 3 〔例〕 主人が大切にしている盃を落として割ったこと。(22字)
- 4 工
- 5 イ

配点 各2点 10点満点

〈解説〉

- ① 「堪忍記」は、江戸時代初期に、浅井了意によって、八卷二十五章にまとめられた仮名草子である。「堪忍(〓こらえてがまんすること)〓こそ人間が生活をする上で基本的なものであるという筆者の考えに基づいて、日本や中国の昔話や逸話、世間話の類に至るまで、数多く集め、その教訓を記したものである。
- 1 古文の会話文の終わりは「と言ふ」「と申す」「とのたまふ」などのように、ほとんどの場合「と」で受ける。本文の四行目に「といふ」とあることから、その前の「来たれ」までが会話文だとわかる。後は、そこからさかのぼっていき、会話文が始まるところを見つける。
- 2 古文に出てくる格助詞「を」以外の「を」は、すべて「お」に直す。
- 3 傍線部②の直前にある「童、持ち来たり。地にうち落としてくだけたり(〓使用人である童が、韓琦が秘蔵している宝玉でできた盃を持ってきた。しかし、その盃を下に落ちて割ってしまった)〓」の部分を使ってまとめる。
- 4 傍線部③の直前に、「物のやぶるるは、みな天道のさだまり事なり(〓物が壊れるのは、すべて自然の道理で決まったことである)〓」とあることから、盃が割れたのは、使用人である童のせいではないと韓琦が考えていることがわかる。つまり、盃が割れたのは自然の道理なので、お前が悪いのではないと、韓琦は童に言っているのである。
- 5 この文章の教訓は、最後の段落に述べられている。「我が身として我が心になはぬ事のあるなれば、いはんやめしつかふ者には、その堪忍なからんや(〓自分の体であつても自分の思い通りにならないことがあるのだから、ましてや自分が召し使う者に対しては、それを許す心とすることが必要である)〓」の部分と、イ「自分の思い通りにならないことが

あっても、それを許せる寛容さをもつべき」の部分が一致していることに注目する。

〔大意〕

ある時、(韓琦が)金百両で、宝玉でできた盃を買い取り、とても大事にしまっておき、これを愛していらつしゃった。ちょうどその時、(韓琦のもとを)めったに会えない客が訪れた。(韓琦が、その客に)酒を出しておすすめになったときのこと、「私は秘蔵の盃を持つている。それを持つて来なさい」と(韓琦が)言った。使用人である童が、(韓琦の秘蔵している宝玉でできた盃を)持つてきた。しかし、その盃を下に落として割ってしまった。使用人である童は、驚き悲しんだが、韓琦は少しも機嫌を損ねることなく、笑いながら言うには、「物が壊れるのは、すべて自然の道理で決まったことである。(だから、盃が割れたのも)お前の過失ではない」とおつしゃった。

主人として、人を使う時には自分の思い通りにならないことが多いものである。自分の体であっても自分の思い通りにならないことがあるのだから、ましてや自分が召し使う者に対しては、それを許す心というのが必要である。